

# 実習施設と保育士養成校の協働による 保育実習（保育所）の実践

－実習日誌の検討を手がかりとして－

A Practice at Collaborative Practical Training for Trainee Nursery School Teachers between  
Training School for Nursery Teachers and Nursery Institution.

|   |   |     |           |
|---|---|-----|-----------|
| 澤 | 津 | まり子 |           |
| 宮 | 本 | 安 恵 | （宇野保育園）   |
| 岡 | 崎 | 典 子 | （浜保育園）    |
| 牧 | 野 | 葉 子 | （浜保育園）    |
| 山 | 根 | 和 枝 | （弘西保育園）   |
| 中 | 島 | 由 香 | （弘西保育園）   |
| 吉 | 永 | 智 恵 | （弘西保育園）   |
| 山 | 根 | 順 子 | （なかよし保育園） |
| 熊 | 代 | 祐 子 | （なかよし保育園） |
| 牧 |   | 里 実 | （なかよし保育園） |

## 抄 録

実践力を備えた保育士養成のために、実習や実習指導の充実を図ることが求められている。実習を核とした保育士養成を実現していくためには、保育現場との協働が不可欠である。本研究では、実習園と養成校とが実習日誌の検討会を設けて、双方にとって実習を効果的に進めるための改善案を検証した。協働による実習改善を実施していくためには、立場の違いを乗り越えていく相互の信頼関係の構築が基となり、前向きで粘り強く共通理解を積み上げていく過程の中で合意点を見いだすという知見を得た。実習日誌の改善によって、実習生と実習担当保育士間の信頼関係が構築され、実習生は子ども理解に止まらず、保育士の心の内を意識化する記述へと深化していく姿が認められた。また、実習担当保育士から記録の方法を伝授され、「反省的实践能力」として重要となる主体的な「学び」や「気づき」を引き出す記録のあり方を習得した。実習担当保育士は「反省的实践家」としてのモデルとなる方法を見いだした。

キーワード：保育所実習、協働、実習日誌、実習担当保育士

## I はじめに

平成21（2009）年に保育士養成課程が改定され、保育現場の実情を踏まえた実践力や応用力をもった保育士養成のために実習や実習指導の充実を図り、より効果的な保育実習にすることの必要性が強調された。実習を核とした保育士養成を実現していくためには、保育現場との協働が不可欠である。

岡山県内の保育士養成校では、岡山県保育士養成協議会の保育実習委員会を中心に、実習園と養成校との連携が既に行なわれている。本学ではその連携をさらに一歩進めた形で協働による保育所実習のあり方を模索している<sup>1</sup>。それは、単に養成校の要望を実習園が実践するのではなく、実習園と養成校とが対等の立場で課題意識を共有し、解決に向けて一緒に協議・検討した内容を実習で試行し、その結果をふまえてさらに協議・試行を繰り返すことをイメージした長期的な協働である。また、協働することによって、養成校のみが恩恵を受けるのではなく、実習園においてもメリットとなる方法を模索したいと考えていた。

養成校の実習担当教員（以下養成校教員という）は、実習日誌の振り返りが年々深まらなくなっていくことについて、また、指導実習における実習生の負担軽減について、改善策はないものかと模索していた。澤津（2012）は、実習園が何を求めているのかを把握するために昨年予備調査を行った。その結果、実習日誌に関して以下のことを明らかにした。直接実習生と向き合う実習園の実習担当保育士は、実習指導の大切さを理解しているものの負担も感じていた。中でも指導した内容が正しく伝わらないという困難さを感じていた。また、保育現場と養成校で温度差を感じる内容もあるとし、勉強会の必要性も感じていた。一方で、実習生も実習日誌の書き方や記述量について困難に感じていた。

保育士の保育記録と実習生の実習日誌の関係について、小山（2007）も「保育記録は幼児理解を深め、保育実践を振り返る文書として保育者にとって不可欠なものである。保育を学ぶ学生にとっても実習での記録を書く意義は大きい。それは、幼児理解と幼児に適切な保育者の援助・指導の観点を磨くことにもなるからである<sup>2</sup>。」といい、子どもと直接関わる実習において、子ども理解と保育者の援助理解を習得させることに実習日誌の意義があると唱えている。

増田（2009）は、保育現場との協働の足がかりとして、保育現場の課題をテーマにして保育現場と養成校がともに学ぶ保育研究会を立ち上げた<sup>3</sup>。本学も増田に倣って当面の身近な課題をテーマに、実習園と養成校とが対等に本音を語りあうことを大切に、そのことが両者の協働を深めることを目指して、実習日誌の検討会を立ち上げた。

実習日誌の検討を実習園と養成校とが協働で行うことは、相互の情報交換及び意見交換によって相互の理解が深まり、双方にとって意義のあることである。また、日誌の問題点を改善することで、日誌の指導がしやすくなれば、実習担当保育士の負担軽減につながるのではないかと考える。

そこで本研究では、実習園と養成校とが実習日誌の検討会を設けて、双方にとって実習を効果的に進めるための改善案を作成し、実習の際にそれを試行し、実習後に協働による実習改善に関する試みについての成果を検証するとともに、改善された実習日誌について検証することを目的とした。

## Ⅱ 方法

### 1 実習日誌の検討会による改善案作成

平成25年5月30日及び6月26日の2回、昨年予備調査を実施した4園の実習指導者9名と本学の養成校教員が集まり、実習日誌の検討会を実施し、改善案構築と相互理解の促進をはかった。実習園の参加者の内訳は、副園長2名、主任3名、クラス担任4名であった。

### 2 実習日誌改善案の検証

改善案は、4園に配属された11名の実習生の協力を経て実施した。担当クラスの内訳は、0歳児クラス1名、1歳児クラス2名、2歳児クラス1名、3歳児クラス3名、4歳児クラス3名、5歳児クラス1名であった。

実習後の実習生の検証は、養成校教員によって実習報告書及び実習日誌を読み取り、その内容を実習生に確認した。実習園の実習担当保育士及び養成校教員については、8月28日の実習日誌の検討振り返りの会において検証した。

## Ⅲ 結果及び考察

### 1 実習日誌の検討会

検討会では、実習日誌に直接的に関係しなくても、実習に関して重要な意見が多く述べられた。実習を実施するために必要な内容については記述に盛り込んだ。

#### 1) 養成校の立場としての意見

実習日誌について一番の課題は、反省・考察が深まらないことであった。現行の時系列に1日の流れを追って記録する様式は、保育の流れを理解することには効果的であるが、子ども一人一人を深く理解したり、保育士の援助行動を理解したりという観点が育ちにくい。子どもや保育士の理解を深めることができれば、反省・考察につながっていくのではないかと考え、エピソード記録をとることを提案した<sup>4</sup>。

次に、実習計画の中心となる指導実習については回数の軽減を望んだ。それは実習生に楽をさせたいわけではなく、事前準備と指導後の反省・考察に十分な時間をかけることによって、指導実習の質を上げることがねらいである<sup>5</sup>。また、ショート(手遊びや絵本の読み聞かせ)の部分指導を指導案無しで実施することは可能か、図りたい。

実習初期は極度の緊張を伴う実習生が増えているため、実習園の受け入れ態勢と

して話しやすい雰囲気づくりを要望した。

## 2) 実習園の立場としての意見

実習日誌や指導案が手引の丸写しでは指導のしようがなく、自分の言葉で書けるようにしていかなければならない。また、実習生は保育を見る視点が備わっていないため、保育士の指導の意図が正しく理解されていないことがよくあるので指導を丁寧に解説する必要がある。指導実習は実習でしか経験出来ない貴重な体験であり、できるだけ多く実践の経験を積むことが望ましい。実習日誌の反省・考察欄が深まらない。

## 3) 実習生の立場としての意見

実習生は検討会に参加していないが、実習生の意見も参考にした。

子どもや保育士の様子を観察して詳細に記述すれば、日誌1日分のスペースでは不足することが予想される。どの程度の記述が必要か。また、毎日大きな変化の少ない生活部分についてはどの程度省略してよいか。その日のねらいにそった観点の捉え方が難しい。

# 2 実習日誌改善点についての考察

養成校、実習園、実習生間の問題点を整理し協議した。その結果は以下の通りである。

## 1) 記述量

日誌1日分の記述は詳細に書くことが望ましいが実習全日の必要はない。生活部分の記述は毎日大きな変化があるわけではないので、最大限詳細な記述は1～3日目までとする。

## 2) 「本日のねらい」の捉え方について

ねらいを念頭において保育士の環境構成・援助を読み取ることを目的として、日誌には、その日の中心となる活動の場面のみを記述する。

## 3) エピソード記述の導入につて

実習生が子ども理解や保育士の援助行動を学ぶためには、従来の様式に加えて、1日の中で一番気になった場面をきりとり、集中して掘り下げていくエピソード記述が有効であり、その導入を試みる。

## 4) 指導実習について

実習園と養成校の双方の見解を理解した上で、実習生の実情も考慮して協議を重ねた。その結果、実習の手引に示された目安ではなく、各実習園における従来の回数の1～2割減を目安とした。合わせて、学生の実態に即した配慮も必要に応じて行なうこととなった。指導案無しの部分指導については、効果が薄いとの共通認識に至った。

## 5) その他

実習日誌及び実習全般（マナー、本学の学生の特質等）について共通理解をしたり、実習園と養成校が素直な意見を交換したりすることによって、相互理解の促進と改善点を模索することができた。

以上の協議から、従来の実習日誌の様式について、改善点を3つ提案した。

1～3日目：保育の流れに重点をおいて、1日の流れを可能な限り詳細に記録する。

（生活部分の記述は1～3日目のみとした）。

4日目以降：当日の中心となる活動の場면을記述する。

4日目以降：1日のなかのエピソードを記述する。

### 3 実習日誌改善点の検証

実習終了後、3つの改善点について、養成校、実習園、実習生の立場から次のような意見がでてきた。

改善点（1）「1～3日目、保育の流れに重点をおいて、1日の流れを可能な限り詳細に記録する」について＜事例1参照＞

#### ① 養成校

慣れない実習生にとって、1日の流れを可能な限り詳細に記録することで、保育所の1日の流れが把握でき、精神的な安定を図ることができたようである。内容は、保育士の配慮欄に対する認識が実習生と実習担当保育士間にずれがあるが、この段階ではいたしかたないことである。

#### ② 実習園

1日の流れをつかむという意味ではよかった。最初の3日間という期間限定のため、集中して書けていた。保育士の配慮欄は難しかったようで書けていない。生活部分の記述は1～3日目のみでよい。

#### ③ 実習生

3日間に限定し可能な限り細かく書くという明確な目標があったため、しっかり観察して1日の保育の流れを把握することができた。この方法によって、3日間で劇的に書けるようになった。1日分をどうやって1枚に収めようと苦心する悩みも解消された。この記録は、指導案や振り返りにも活かせたと思う。

改善点（2）「4日目以降当日の中心となる活動の場面の指導内容を記述する」について＜事例2参照＞

#### ① 養成校

中心となる活動は主に遊びの場面であるが、十分とはいえないながらも、実習生にとって次に行なう自分自身の指導実習のモデルとなるため、学習効果は高かったようである。さらに、実習担当保育士の解説や指導により少しずつ詳細な記述がで

(きりん)組 (4歳児) 氏名( )

集中(21)的 程度

環境に対する自分の行動が子にどのような影響を及ぼしているかを頭に置いて  
実習をふまげに読んで下さい。 - 18 -  
(1)

140





改善点（３）「４日目以降１日のなかのエピソードを記述する」について＜事例３参照＞

① 養成校

実習生に対し事前の説明が不足しており、捉え方・書き方が理解できていなかった。記述項目については再検討し、書きやすくする必要がある。従来の様式に比べ、子どもの内面理解が深まった実習生が多かった。さらには子どもに関わる保育士の行動やその内面にまで思いが及んだ実習生も見られた。一方で、表面的な出来事と捉えている実習生は理解が深まらず、格差が顕著であった。

② 実習園

エピソード＝トラブルと捉えている実習生がいた。「どうしてだろう」は書きにくそうと、記述例があってもよかった。自分（担任）の見ていない子どもの様子がよくわかった。初期の表面的な見方から、次第に子どもや保育士の内面を注意深く見ようとする意識が持てるようになった。子どもを肯定的に見たり、子どもたちの思いに寄り添ったりしている記述が多く見られ、日誌を読むのが楽しみだった。また、実習生が１日の保育の中でどこを気にしているのかわかり、ピントがずれているところも認識できた。エピソード記述は見る目が育ってから、実習Ⅱで実施するのが効果的だと思う。深みのある実習日誌になり、方法としてはよい試みであった。

③ 実習生

捉え方・記述に苦戦しながら、次第に出来事から子どもの心情や保育士の内面を注意深く見ようとする意識が持てるようになり、捉え方が変化していくのを実感している。その時の保育士の対応を参考に、自分なりの援助の仕方を考えるようになってきた。エピソードをもとに、担任の先生と深い内容の話ができるようになり、子どもを見る目が優しくなった。

#### ４ 小まとめ

##### １）実習園と養成校の検討会における協働の効果

- （１） 実習日誌の検討会それ自体が、実習内容・方法について、実習園間での協議や調整等の場を繋ぐ役割を担っている。
- （２） ４園の実習担当保育士間及び養成校教員との交流が深まることによって、相互の実態理解と、情報交換の場となった。
- （３） 実習担当保育士は実習日誌の改善に積極的に関わったことによって、指導の負担感を感じながらも、これまで以上に日誌に関心をもって指導に臨むことができた。
- （４） 実習園と養成校の見解の相違について、双方の見解を理解し合意点を見つけることができた。

##### ２）実習日誌改善点の内容検証

- （１） 保育の流れに重点をおいて、１日の流れを可能な限り詳細に記録するについて



実習生は1日の流れを3日間可能な限り詳細に記録することで、保育所の流れは把握できた。当初の目的は概ね達成されたといえる。保育士の配慮に対する認識について、実習生と実習担当保育士間にずれがあるが、実習3日目の段階では当然ともいえる。

#### (2) 中心となる活動の場面を記述するについて

実習生は、中心となる活動の場面についてその日のねらいを意識しながら観察し記述したが、初期の段階では保育士の援助を理解し記述することは容易なことではなかった。実習担当保育士の解説や指導を受け、保育士の援助について読み取りを深めていった。実習生にとって、保育士の援助について読み取りを深めることは、自分の指導実習に活かすための反省・考察につながることを理解させる必要がある。

#### (3) エピソード記述について

実習生は、捉え方・記述に苦戦しながら、次第に出来事から子どもの心情へと捉え方が変化していくのを実感している。さらには、子どもに関わる保育士の行動やその内面にまで思いが及んだ実習生も見られた。一方で、表面的な出来事と捉えている実習生は理解が深まらず、格差が顕著であった。保育士の見ていない子どもの様子がわかったことも成果である。エピソードを通して実習生と保育士間に信頼関係が構築された意義は大きい。

### Ⅳ 総合考察

#### 1 協働による実習改善に関する試みについて

実習園と養成校の協働について、本研究を振り返ってみる。

実習日誌の検討会は、4園の実習園から9名、養成校から1名の参加者10名の小規模な会であり出席者全員が忌憚のない意見を言い合うことのできる場となった。

指導実習に対する見解の相違について協議した。養成校は指導実習の質をあげることによって量的軽減を要望し、実習園は実習でしか経験出来ない貴重な体験として、できるだけ多く実践の経験を積むことが望ましいとの見解である。半年後に保育者として現場に就職する現実を思えば、実習園の意見はもっともなことであった。

養成校は、実習自体は20日間で終わるが、その後の半年の学内での事後指導によって、学生は変容・成長していくことを説明した。実習園は、実習生の指導にあたって、後輩を育てるという使命感をもって携わっていることを説明した。双方とも、実習に対する思いを語り、じっくり時間をかけて議論した。こうした重要な協議においては、相互の信頼関係が構築されなければ議論は前に進まない。無理をせず、機が熟すのを待った。検討会は、意見の一致するところから共通理解を積み上げていった。相互の意見を尊重しながら意見交換をするなかで、次第にそれぞれの立場の違いを認める前向きな発言が出てきた。結果、指導実習は実習の手引通りではなく、現状の1～2割減少することで方向性を探り合意点を

見いだすことができた。実習日誌については、既述の通り3項目を改善・試行することで一致した。

協働による実習改善を実施していくためには、立場の違いを乗り越えていく相互の信頼関係の構築が基となり、前向きで粘り強く意見の合意するところから共通理解を積み上げていく過程の中で合意点を見いだすことができた。それは、協働による実習改善の大きな成果であった。

## 2 改善された実習日誌についての考察

### 1) 「保育の流れに重点をおいて、1日の流れを可能な限り詳細に記述する」について

最初の3日間で、1日の流れを可能な限り詳細に記述するという当面の目的は、1日の保育の流れが把握できたことで、不安な実習初期を乗り越えることができ、達成されたといえる。

### 2) 「当日の中心となる活動の場面を記述する」について

実習生本人の学びへの姿勢・意欲・資質もあるが、実習担当保育士の指導・助言のもとで、子ども理解と保育の読み取りが深まっていった。木内(2004)は、子ども理解をより高めるための重要な要素として「実習日誌指導者の適切な指導・助言」を挙げている<sup>6</sup>。実習生の質問・疑問への応答や、実習生がなにげなく記述したことの意味づけを実習担当保育士から与えられることによって、実習生は実習での学びを確かなものにしていくことができた。

### 3) 「エピソードを記述する」について

志村(2011)は、「実習生と担任が置かれている立場の違いを乗り越えて、実践について話し合うことが省察につながる可能性」であると指摘している<sup>7</sup>。本稿においても、エピソードを話題として、実習担当保育士と深い内容の話ができるようになったことが報告されている。成長を長いスパンで捉えることの大切さを理解し、子どもを見る目が優しくなったとも語っている。実習生の自己変容を促すものとして有意義であった。エピソードの記述を通して、実習生と実習担当保育士間の信頼関係が構築されたことは、実習の大きな成果といえる。

また、幸(2008)は、「子どもの内面や行動の意味を深めることだけでなく保育者の子どもへの働きかけ(関わり方)と「思い(内面)」を記述することが大切で、保育を深めるためには、どう働きかけるかではなく「なぜそのように働きかけたか」という「保育者の心の内を意識化」することが大切であるという<sup>8</sup>。今回試みたエピソード記述の大半は、第1段階レベルの子ども理解であったが、少数の実習生については、次の段階である保育士の心の内を意識化する記述へと深化していく姿が認められており、特記すべきことであった。

### 4) 「反省的实践家」の芽生え

日誌改善の成果として、反省・考察を深めるための観点として、その日の主な活動の記述やエピソードの記述から、子ども理解や保育士の援助理解を深める視点をもつと共に、実習生の自己変容を促すことの重要性を認識することができた。保育現場においても求められている「反省的実践能力」として重要となる主体的な「学び」や「気づき」を引き出す記録のあり方にたどり着いたことの意味は大きい<sup>9</sup>。それは実習担当保育士のみならず実習生にとっても不可欠な保育の能力である。実習担当保育士の記録の方法が実習生に伝授されると、読み取るレベルは実習生と保育士とでは格段の開きはあっても、子どもに向き合うその方向は同じである。「反省的実践家」としての基礎を保育士から学ぶことの意義は深い。共有の保育場面においてカンファレンスに参加したりすることが可能となれば協働はさらに進んでいくのではないかと期待する。

今回の日誌改善が、実習担当保育士にとって負担軽減になったとは言いがたいが、指導内容を絞ったことで幾分指導しやすくなったといえる。しかしながら、実習担当保育士の「日誌を読むのが楽しみであった」、「深みのある実習日誌であった」との感想は、実習園においても将来を共にする後輩の育成とともに、実習担当保育士にとって「反省的実践家」としてのモデルとなる方法を見いだしたことの証といえるのではないかと考える。

## V おわりに

昨年産声をあげた実習園と養成校の協働による保育所実習の試みは、今年から実践として本格的にスタートした。実習園の実習担当保育士と養成校教員が立ち上げた実習日誌の検討会は、実習園と養成校が、相互に現状や課題を交流し、望ましい実習の前進のために共同研究を行う協働の体制構築に向けての第1歩である。この歩みを堅実なものとし、さらに協働を深めていくためには、少しずつ裾野を増やしていくことや、負担にならない程度の定例化も検討していくことも必要であろう。

また、実習日誌の改善については、エピソード記述の内容や導入時期等、改善が必要である。さらに、実習日誌から継続して指導案の指導内容における検討を今後の課題として取り組みたいと考えている。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただきました保育園の諸先生方に、深く感謝申し上げます。

- <sup>1</sup> 澤津まり子、村田恵子 (2013) 「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習（保育所）の試み」『就実教育実践研究』第6巻、83-97.
- <sup>2</sup> 小山祥子 (2007) 「「幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究Ⅱ－エピソード記録型実習日誌の効用と課題－」『北陸学院短期大学紀要』39,45-58.
- <sup>3</sup> 増田まゆみ、小櫃智子、佐藤恵 (2009) 「保育士養成校と保育現場との連携に関する一考察－保育研究会の取り組み－、全国保育士養成協議会第48回研究大会研究発表論文集,228-229.
- <sup>4</sup> 穴戸良子、柴田千賀子、狩野奈緒子 (2013) 「実習記録形式改訂による可視化（1）－エピソード記録から子ども理解を深める－」日本保育学会第66回大会発表要旨集,400-401.
- <sup>5</sup> 岡山県保育士養成協議会保育実習委員会編「保育所実習の手引」平成25年改訂版.
- <sup>6</sup> 木内英実、増田まゆみ、西方栄 (2004) 「実習日誌を通しての子ども理解の変化－保育者養成における実習教育」日本保育学会論文集53,608-609.
- <sup>7</sup> 志村聡子 (2011) 「学生が書いたエピソードに基づく幼稚園実習事後指導－省察としての学び合い－」『教師教育年報』20,135-145.
- <sup>8</sup> 幸順子、紀藤久美子、秋田房子 (2008) 「反省的实践」に有用な保育実習記録様式作成に関する研究－実習生と保育所への調査結果を通して－」保育士養成研究第26号,67-76.
- <sup>9</sup> D.A. ショーン (2001) 『専門家の知恵』、佐藤学・秋田喜代美訳、ゆるみ出版.